

子どもの「気づき」から保育を考えるⅡ

—水の不思議を感じた遊びから—

○荒井まこよ 後藤和佳子 森川 紅
(姫路市立大塩保育所) (姫路市立高岡保育所) (姫路日ノ本短期大学)

1. はじめに

幼児期において自然のもつ意味は大きく、子どもは自然にかかわって遊ぶ中で様々な出来事の不思議さに「気づき」、心を揺さぶられ、発見し、好奇心をもって遊ぶ。保育指針に「自然事象の性質や変化、大きさ、美しさ、不思議さなどに関心を深める」とあるように、「気づき」から保育を展開し創造することは、「もっと知りたい」という知的好奇心や探求心を育むにつながる。また、遊びは生きる力を育む学びの基礎として、小学校以降の「読む、書く、話す、判断し、表現する」といったすべての教育の前提としてあるといえる。

子どもが遊びの中で感じた「気づき」を出発点として保育を創造することの重要性を、昨年第56回日本保育学会で“風を感じた遊びから”として発表した。今回は“水の不思議を感じた遊びから”報告したい。

2. 方法

- 方法：兵庫県H市 O 保育所、S 保育者が子どもが水の不思議発見をした「気づき」場面を記載した保育日誌より取り出し検討、分析する。
- クラス編制：5歳児19名

3. 事例と考察

(▲環境 ○子どもの活動 ☆保育者のかかわり)
(事例Ⅰ) “うずまき” 発見！

▲プールの水栓を抜くと、「ゴーゴー」と音がする。
○プールの近くにいたH男が「えっ、なんのおと？」と、気づく。他児も集まり、耳をすませている。
☆「何の音かな？」と、耳を傾けて子どもたちの気づきを待つ。
○「あっ、プールからきこえる」と、プールサイドに行き、「みずや、みずのおとや！」と、水が排水口に流れていく様子を見ている。
○「みて！みずがあつまりよう」「すいこまれている」「グルグルまわっている」「うずまきや！」「ほんま、たつまきみたいや！」と、腕をグルグル回して表現している。
☆「うわあ、本当！」と子どもの気づきに共感する。
☆子どもたちが発見した“渦巻き”を遊びに生かさないかと考える。
▲プールの中で“渦巻き”を体験できるように、みんなで輪になって遊ぶ活動を取り入れていく。
○友達と手をつなぎ「こんこんちきち、こんちきち

…」と歌いながら気持ちを合わせて歩いていく。
☆保育者も共に動きながら“流れ”を作っていく。
○少しずつ速く歩き、水に“流れ”ができると「うわあ、ながされそうや！」と、大喜び。
▲“流れ”に乗れるように合図を送る。
○「いち、にの、さん！」でみんなと一緒にしゃがむと「キャーッ！、ながされる！」「まわってるー！」「うずまきや！」…などと歓声を上げながら“流れ”に身を任せて遊んでいる。

【考察】

水が流れる音に気づいた子どもたちは水の動きを観察し、渦巻きを発見する。プールの中で友達と手をつなぎグルグル回って“流れ”に乗ることで、渦巻きに気づき、水の“流れ”や“勢い”を実感している。

(事例Ⅱ) “うずまき”を作ろう

▲“渦巻き”を作って遊べないかと考え渦巻きに関する本と渦巻きが作れる遊具(ペットボトルに水を入れて、口をつなぎ合わせた物)を置いておく。
○「これなに？」と興味を示し見たり触ったりする。
☆“渦巻き”が作れる遊具であることを知らせる。
○「つくりたい！」と言ってペットボトルや接着テープなどを用意し、本や見本を見て作り始める。
○1本のペットボトルに水を入れ、もう1方のペットボトルの注ぎ口と合わせて、テープを止める。
☆接着テープを止めやすいように支えたりつなぎ目から水が漏れないように補強を手伝ったりする。
○つながったペットボトルを逆さにしても、本のように“渦巻き”ができない。「あれ？あわがでる」「おかしいな？」と言って、ペットボトルを振ったり、繰り返して逆さにしたりしている。
○N男はペットボトルをグルグルと回している。
☆“渦巻き”が出来る方法を探っている姿を見守る。
○「やったあ！“うずまき”ができた」と大喜び。
○他児もN男の周りに集まり「どうするの」「おしえて」と言うと、「こうやってまわすんや」「みとってみ、みずもまわるで」と、N男がやって見せる。その様子を真剣に見つめ、真似て遊んでいく。
○「Nくんみたいに“うずまき”ができない」というK子に、「みずがすくないんや」「もっとグルグルまわしたら」などと友達同士教え合っている。

【考察】

自分たちで作った遊具を使い、どのようにすると渦巻きができるか、試しながら遊ぶ中で、水の“量”や“勢い”、“回転”などが渦巻きの発生に必要なことを、子どもなりに気づいている。

〈事例Ⅲ〉 水は力持ち

▲存分に浮いたり潜ったりして楽しめるように、プールの水量を増やしておく。
○だるま浮きをしているT男の背中を、R子が押さえ水の中に沈めると直ぐに浮いてくる。「うわあ、フワフワや、ボールみたい」と言いながら、T男とR子は交代し合って繰り返し楽しんでいる。
○楽しそうな二人の様子を見て、他児も友達と誘い合って遊び始める。「ほんまやボールみたいや」「おしてもすぐにあがってくる」と言っている。
☆「どうしてかな」「不思議だね」と言葉がける。
○「えっ、どうしてやる？」…としばらく考えている。「そうや！みずのなかやからや」「だってぼくらのからだしずまへん、うくもんなあ」「そうや、みずがちからもちなんや！」と言っている。

【考察】

プールで友達とだるま浮きをして遊び、体が水に浮くことから、“浮力”を実感し「水は力持ち」と表現する。その後、軒下の雨だれで地面が掘れていることに気づいたり、ホースの水を利用して固い土山に穴を掘って遊んだりする中で“水の力”を感じ取っている。
〈実践Ⅳ〉 “しもばしら” 発見から作ってみよう

▲園庭の土山に霜柱が出来ている。
▲氷や霜、霜柱、雪などの自然事象について見たり調べたり出来るよう、絵本や図鑑を出しておく。
○土山に登ったE子が「ここあるいたら、おとがする」「ほんとや」とN子。2人で「こっちもきこえる」「ここもサクサクっていう」と踏むと音がする場所を探している。
☆霜柱の気づきから遊びがどう発展するか、見守る。
☆「どうして音がするのかな？」と言葉がける。
○「えっ？」と、音がする所をよく見て「あっ、なにかはっけん！」とE子。「えっ、どこ？」と周りの子どもも集まってきて、一緒に覗き込む。
○「すごい！つちのなかにこおりがある」「きれいなあ」「キラキラひかっている」「はりみたい！」と言って観察していると「しもばしらや！」とT男。
▲霜柱について、さらに調べたり考えたり出来るように“しもばしら”の絵本を用意しておく。
○絵本を見ていたT男が「れいぞうこでもしもばし

らできるんや」「つくってみたい」と言い出す。

☆面白そう！うまくできるかな？と思いながら、「どうすればいいの？」とT男に問いかける。

▲T男と一緒に“しもばしら”の絵本を見ながら容器、新聞紙、ぬるま湯などを用意していく。

○T男は土山の所に行き、「つちはこのせんまでいれるんやな」と言いながら容器に土を入れる。

○A子とR子も「なにしているの？」「わたしもやってみよう！」と言って参加する。

○絵本で確認しながら、土がタップタップになるまで慎重にぬるま湯を入れ…、冷凍室に。

○約1時間後、「しもばしらできているかな？」と、ワクワクしながら容器を覗き込む。「うわあ、やったあ！しもばしらや！だいせいこう」と大喜び。

○T男達の喜びの声に他児も集まる。「ほんとや」「きれいなあ」「ガラスのおはなみたい！」「しもばしらがつちもちあげとうで」「うん、しもばしらはちからもちなんや」「いっぱいつながつとうから、ちからもちなんや！」などと話し合っている。

【考察】

“しもばしら”の絵本を用意したことから、さらに、霜柱に興味を持ち冷凍室で“霜柱作り”をする。“霜柱”を実際に自分で作ることによって、じっくりと観察し、“美しさ”や“不思議さ”などを感じている。

4. まとめ

子どもは五感を働かせて水に触れながら、流れ、勢い、音、可塑性など様々な特質に気づいていく。また、自然の中での気づきや不思議に思うことを「おや！」「なぜ？」「試してみたい」「もっと知りたい」と好奇心を持ち、遊び、考え、工夫し、友達と喜びを共にしながら探求心や観察力を高め、渦巻きや霜柱について様々な発見をしていった。

5. 今後の課題

5歳児は日々の園生活の中で体験した気づきを、絵本や図鑑を見て、考え、試して、“自然のものを創造する喜び”を味わっていくことがわかった。水（自然）の持つ不思議さへの興味や関心は、子どもに様々な気づきをさせ、個々の知的好奇心や探求心を高め満足させると共に、気づきを通して友達と共鳴し合い仲間関係を深めていったのである。このことは、「自ら学び自ら考える力などの＜生きる力＞の基礎を育てる」につながっていくと考えられる。

子どもたちが、水（自然）の不思議さの「気づき」から遊びを展開していく直接体験は、小学校の「生活科」の「自然とのかかわりに関心をもつ」へと続くと考えるので、研究を継続していきたい。